

どうしたら天国に行けるのか？¹ (Japanisch, Japanese)

「永遠」について考える人は、そう多くありません。

人は時々、「死」については考えますが、「死後」に何が起こるかまでは考えません。

バリモア・ドリユーというアメリカの女優さんは、子役だった頃、E.T.という映画で活躍しましたが、28歳のときにこう言いました。「うちの猫より先に、私が死んだら、私の遺灰を猫に食べさせて。そうすれば、私は猫の中で生き続けることができるわ」。

何と恐ろしい、愚かで短絡的な考えでしょう。

イエス様が生きておられた時、大勢の人々が悩みを抱いてやってきました。

その悩みの多くは、遠い未来のことではなく、その日の、目の前の悩みでした。

- 十人のらい病人が、病気を治してもらいたいと願いました。(ルカ 17・ 12)
- ふたりの盲人が、目が見えるようになりたいと願いました。(マタイ 9・ 27)
- 群集のひとりが、遺産分割の調停をしてほしいと願いました。(ルカ 12・ 13)
- パリサイ人たちがイエス様を陥れるために、「カイザルに税金を納めるべきかどうか」質問しました。(マタイ 22・ 17)

これらは切実な問題でした。しかし長い目で見てはるかに大事なこと、「どうしたら天国に行けるのか」について、イエス様に尋ねる人はほとんどいませんでした。でも、ある金持ちの役人はイエス

¹ Übersetzung des Traktates "Wie komme ich in den Himmel?" ins Japanische.

Homepage des Autors: www.wernergitt.de

様に尋ねました。

「私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか」(ルカ 18:18)。
それに対するイエス様の答は、「持ち物を全部売り払って、私についてくるように」でした。彼は大金持ちだったので、悲しみながらもイエス様の仰せに従うことができず、天国に入る機会を逃してしまいました。

一方、聖書には、天国を捜し求めてはいなかったが、イエス様によって天国の存在を知り、天国に行くチャンスを得た幸せな人物が記されています。ザアカイはイエス様に会いたいと熱心に願いましたが、イエス様に会えたばかりか、それ以上のすばらしいものを手に入れました。イエス様は彼の家に泊まれ、親しく語ってくださり、そしてザアカイは、天国を見出したのです。イエス様のお言葉。

「きょう、救いがこの家に来ました」(ルカ 19:9)

どうしたら天国を見つけられるでしょうか？

天国、つまり天の御国については、次のように言うことができます。

- ・ 天の御国は、いつでも見出すことができます。

このことは、読者のみなさんもまた、今日にでも「永遠のいのち」を手に入れることができる、ということの意味しています。

- ・ 天の御国は、良い行ないによつては手に入れることはできません。
- ・ 天の御国は、何の準備もなく、手に入れることができるのです。

私たちはどうしたら天国に行けるかと、自分勝手にあれこれと考えますが、天地を創造した神様の

言葉に基づかない考えは、すべて間違いです。

間違いの例を二つあげましょう。ある有名な歌手は、サーカスを引退する道化師のために、「彼は道化の演技を通して多くの人々を幸せにした。だからきっと天国に行くだろう」と歌いました。

また、ある金持ちの女性は、二十人の女性が無料で住める大きな家を建てました。そこに住むための条件はただ一つ、金持ちの女性の霊的な救いのため（つまり天国に行けるために）、毎日1時間祈り続けると約束することでした。これらの考えが誤りであることは言うまでもありません。

では、私たちは一体何をすれば、本当に天国に行けるのでしょうか？

イエス様はこのことを説明するために、宴会のたとえ話をなさいました（ルカ 14・16）。

ある人がすばらしい宴会を催したいと考え、多くの人々を招いたのですが、その招きを断る人々が多かったのです。断る理由は、「畑を買ったので」（18節）、「牛を買ったので」（19節）、「結婚したので」（20節）などというものでした。

この「ある人」とは、イエス様のことです。そしてイエス様は、このたとえ話を、次のような言葉で締めくくっておられます。「言うておくが、あの招待されていた人たちのなかで、わたしの食事を味わう者は、ひとりもいないのです」（24節）。

このたとえ話が示しているように、私たちは、イエス様の招きを受け入れて天国に入れるか、それとも招きを拒絶して天国を失うかのどちらかです。肝心なのは、「あなたが」天国への招きを受け入れるか、それとも断るか、です。なんと簡単で、容易なことではありませんか。

時が来て、悲しいことにあなたが天国に入るのを拒絶されるなら、それはあなたが「天国への道を

知らなかった」からではなく、あなたが「イエス様の招きを受け入れなかった」からです。上記のとえ話に出てくる、招きを断った三人は、悪いお手本です。なぜなら三人とも、宴会への招きを理由をつけて拒絶したからです。

では、このイエス様の宴会は、断る人々が多くて中止になったのでしょうか？ いいえ、そうではありません。招きを断った人々が出たので、宴会の主人はひろく世界中の人々に招待状を出しました。今度は特別な招待状ではなく、単に、「来なさい！」と呼びかけられたのです。この招きを受け入れた人々は誰でも、宴会の席を与えられました。そして大勢の人々がやってきました。それでもまだ席があるのを見た主人は、しもべに言いました。「街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れてきなさい」(23節)。

このたとえ話は、現在の私たちとどのような関係があるのでしょうか？

天国にはまだ場所があり、イエス様はあなたにつきのように呼びかけておられます。「来て、天国のあなたの席に着きなさい。正しい判断を下し、あなたの永遠の場所を予約しなさい。今日、そのことをしなさい」。

天国はすばらしい所です。だからこそ、イエス様は宴会にたとえ、私たちに招いておられます。「目が見たことがないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである」(1コリント2・9)。

この地上では、天国に似た所は、どこを探しても見つかりません。天国とはそれほどすばらしい所です。天国を逃すわけにはいかないのです。信じられないほど貴いお方、神の子であるイエス様は、

私たちのために天国への道を開いてくださいました。そして私たちが容易に天国に行けるようになさったのです。

私たちがしなければならないたった一つのことは、ただ「天国に行きたいと願うこと」だけです。先ほどのたとえ話に出てきた人々のように「近視眼的」でない限り、神様からの招きを断れる人はいないはずです。

イエス様を通しての救い、天国への道。

使徒の働き 2 章 21 節は、とても重要な一節です。「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」。

これは、新約聖書の核となる言葉です。

伝道の途中、ピリピの牢獄に囚われていたパウロは、看守にこう言いました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒 16・31)。

この言葉は、簡潔で革命的であり、私たちの人生を根本的に変えてしまいます。事実、看守はその夜のうちに回心し、救われたのです。

イエス様はあなたを「何から救われる」のでしょうか？ これはとても大切な質問です。

イエス様は私たちを、永遠の滅び、地獄に至る道から救い出されるのです。

聖書によると、人は天国か地獄のどちらかで永遠に過ごすこととなります。天国は素晴らしいが、地獄は恐ろしい所です。そしてそれ以外の選択肢はありません。

死んだらすべてが終わりだ、と考えている人々は、死んだ後、実は死が終わりでなかった、という事実に向き合います。

あなたの人生はイエス様との関係によって裁かれるのです。その裁きの結果、あなたが永遠をどの場所で過ごすのかが決まるのです。

ある講演旅行でポーランドに行ったとき、私はアウシュビッツの強制収容所を訪ねました。第二次世界大戦中、アウシュビッツでは恐ろしいことが行われました。1942年から1944年の間に、第三帝国によって160万人以上のユダヤ人が殺害され、その死体は焼かれました。いわゆる「アウシュビッツの地獄」です。

一度に600人が殺されたガス室に案内されたとき、この言葉が頭をよぎりました。それは想像を絶する凄惨な状況だったに違いありません。

1944年にこの悪夢が終わったので、私たちはこのガス室を訪れることができます。もちろんあなたもその収容所跡を訪れることができます。

今はもう、ガス室に送られたり、拷問にかけられたりする人々は誰もいません。アウシュビッツのガス室は終わったのです。

この収容所跡の博物館の入り口に、十字架にかけられたイエス・キリストの絵が掛けられています。殺されていったある囚人が、爪を壁に立てて刻み込んだイエス様の絵です。囚人はその絵を残すことによって、イエス様に対する希望をはっきりと示そうとしたのです。もちろん、この人もガス室で殺されましたが、救い主であるイエス様を知っていました。悲惨な所で亡くなりはしましたが、天国に招き入れられたのです。

イエス様がマタイの福音書で述べられた「滅びの道」(7・13)、「ゲヘナ」(5・29、30)、「永遠の

火」(18・ 8)、また、黙示録で「火の池」(20・ 10、 15)と記された、恐ろしい「地獄」から逃れる道を、私たちは持っていません。また、恐怖と苦痛が永遠に続く場所「地獄」を、訪れてこの目で見ることができません。

しかし、「天国」もまた、永遠にわたって続きます。

そして、その「天国」こそ、神様が私たちを連れて行きたい、と願っておられる所です。

ですからぜひ、あなたも天国に招き入れていただきなさい。

主の名を呼び求めて、天国への予約をなさってください。

ある講演会のあと、一人の女性が私のところに来ました。彼女はとても動揺しているようでした。

「一体どうすれば、天国を予約できるのですか？ 予約と言われると、なんだか旅行会社みたいですけど」。私は答えました。「その通り。どこであろうと、予約しなければ、行きたいところに行けません。あなたがハワイに行きたいなら、航空券を予約しなければね」。彼女は言いました。「その切符を手に入れるためには、支払いが必要ですよね」。「そうです」と私。「天国への切符も当然支払われなければなりません。しかし、その切符はあまりにも高価で、誰一人その代金を払うことはできません。私たちの「罪」が、天国行きを妨げてしまうのです。神様は、天国では罪の存在をお許しになりません。もしあなたが、天国で神様と永遠に過ごしたいのなら、まず「罪」を赦され、救われる必要があります。そして、この「罪」を赦してくださるお方は、罪とは完全に無縁のお方以外にありません。そのお方こそ、イエス・キリストです。イエス様こそは、あなたが天国に行けるために、あなたに替わって代価を支払うことのできる唯一のお方です。事実、イエス様は十字架の上で、ご自身の血潮によって代価を支払ってくださったのですよ」。

天国に行くために、私たちはいったい何をすればいいのでしょうか。

神様は私たち全員を天国に招いておられます。聖書の中には、私たちが神様の招きを受け入れるように促している箇所が、たくさんあります。

- 「努力して狭い門からは入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろうとしても、はいれなくなる人が多いのですから。」(ルカ 13・ 24)
- 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 4・ 17)
- 「狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、それを見いだす者はまれです。」(マタイ 7・ 13 , 14)
- 「永遠のいのちを獲得しなさい。」(テモテ 6・ 12)
- 「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒 16・

31)

これらはみな、神様からの招きの、深く心に響く言葉です。この招きに込められた神様の真剣で暖かい気持ちを、あなたは感じるはずです。今、私たちがすべきことは、次のように祈って、この招きを受け入れることではないでしょうか。

「主イエス様。

あなたを通してでなければ、天国に行けないことを知ることができました。

いつの日か天国で、イエス様とともに永遠にいたい、と願います。

自分の罪のために、本来は地獄に向かうべき私を、どうか救い出してください。

あなたは私を愛してくださって、私のために十字架の上で死んでくださり、

私が受けなければならない罰の身代わりとなってくださいました。

私の子供のときから現在まで、心で、身体で犯した罪を、あなた様はすべてご存知です。

私が思い出せる罪、また思い出せないあらゆる過ちをも、あなた様はすべてご存知です。

あなた様の御前に、私のすべてはさらけ出され、知られています。

今のままでは、天国に行ってあなた様と共にいることなど、許されません。

ほんとうに、ごめんなさい。どうか私の罪をお赦してください。

私の人生に直接介入してくださって、私を新しくしてください。

あなた様をご覧になって、正しくないことを、すべてやめられるようにお助けください。

良い習慣を身につけられるようにお助けください。

あなた様が語られた御言葉である聖書を、理解できるように、助けてください。

あなた様が私に語ってくださることをすべて、理解できますように。

みこころにかなう、従順な心を私にお与えください。

私は、あなた様についていきたいのです。

私の人生のあらゆる局面で、私の進むべき道をお教えください。

あなた様は、私の祈りをいつも聞いてくださいますから感謝します。

神様の子供とされていること、天国であなた様と共に永遠にいられることを、感謝します。アーメン。」

Prof. Dr. *Werner Gitt*

(ヴェルナー・ギット教授・博士)